

E. S. モース著『Japan Day By Day』初版本 —自筆メモからみるモース晩年の交友関係の一端—

大本朋弥

I. はじめに

同志社大学歴史資料館では、考古資料、民俗資料をはじめとした歴史資料の収集・保管を行っており、この度、エドワード・シルベスター・モース（Edward Sylvester Morse、以下、モースと記述）著、『Japan Day By Day』の初版本を購入した。当資料館購入本（以下、本書と記述）には、モース自筆と思われるメモをはじめ複数の走り書きがなされている。初版本自体も僅少であることから、これらの史料的价值に鑑み、今回、自筆メモについて検討を行うとともに報告を行う次第である。

II. 『Japan Day By Day』概略

モースは、「アメリカ動物学の父」といわれるルイ・アガシーに師事し、腕足類の研究を行っていた。その後、1877・78年、腕足類が多数生息する日本にお雇い外国人として来訪し、東京大学理学部初代動物学教授に就任した。来日期间中、モースは腕足類研究のみならず、日本考古学の原点である大森貝塚の発掘、陶磁器の蒐集などさまざまな日本文化に対して関心の目を向けた。『Japan Day By Day』は、モースが日本に滞在した2年間で見聞したことを777におよぶモース自筆のスケッチとともに記載したもので、上・下2巻組で1917年にリバーサイド印刷（The Riverside Press）より発刊された。当時、英語で日本を紹介した書物としては卓越した評価を受けた書物であり、現在でも明治10年ごろの生活文化をはじめとする日本の様子を知るための重要な資料である。

III. 本書の自筆メモ

本書の保存状態は非常に良好であるが、古書店での購入であるため、来歴については不明な部分が多い。しかしながら、上巻の見開き部分にページを違えて3つのメモ（図1・3・4）が見られる。以下、それぞれの判読を行い、検討を加えていく。

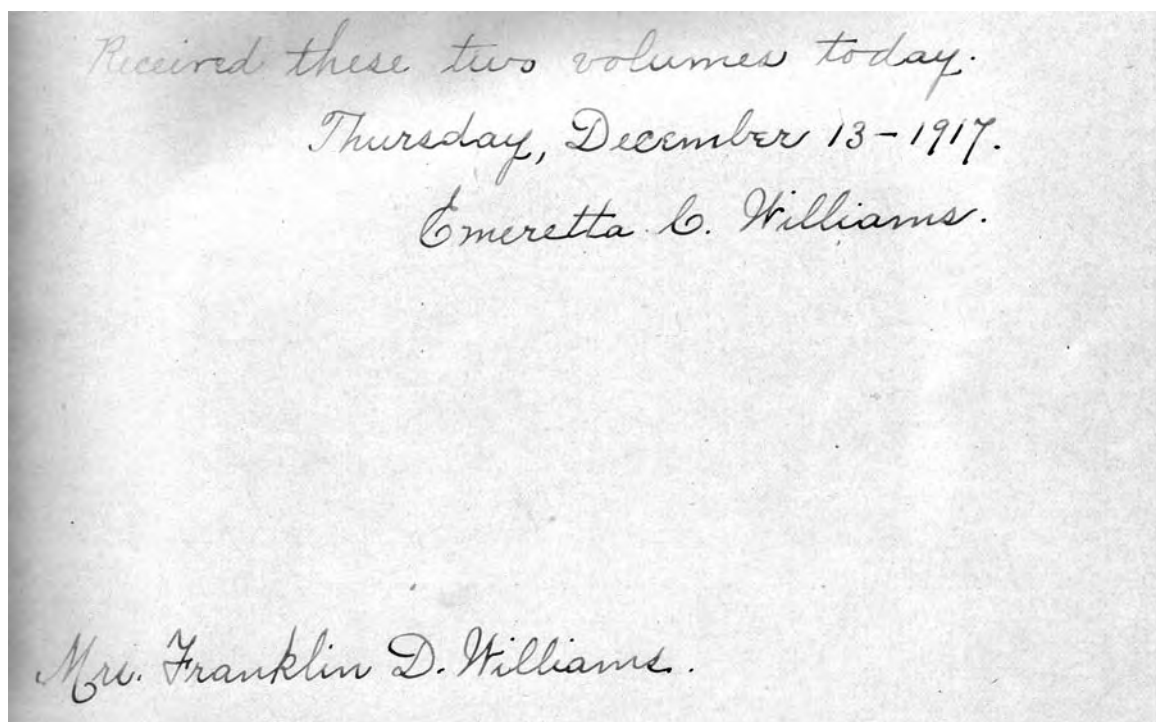
I trust you will not be disappointed
in the book. Edw. S. Morse

図1 モース自筆メモ①

Edward S. Morse

<許可なく複製転載することを禁止します>

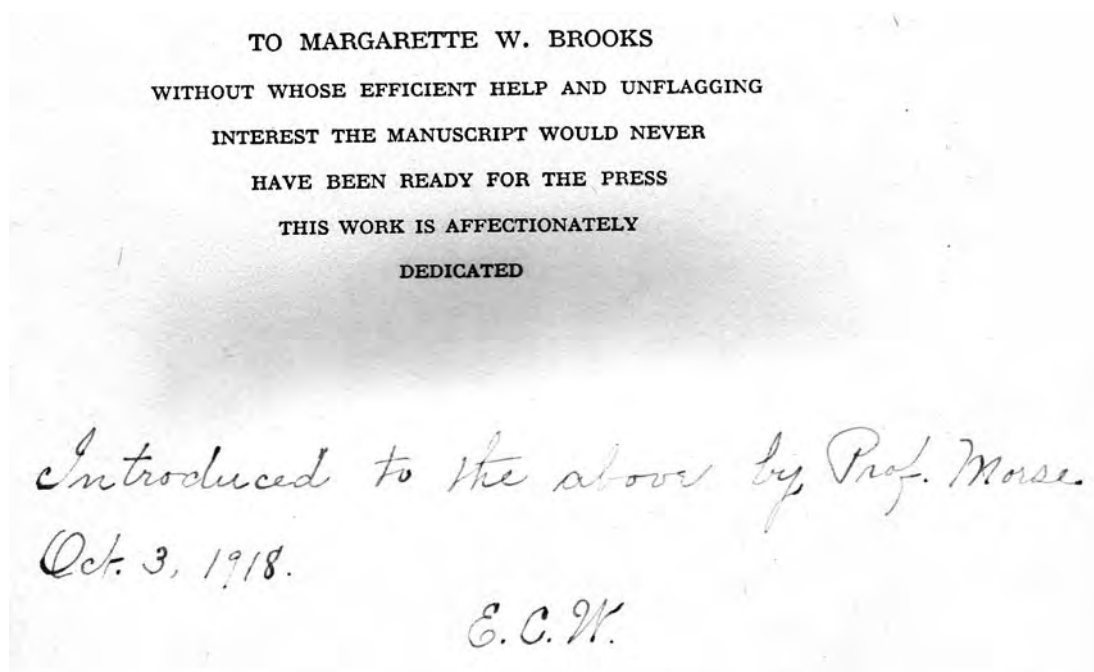
図2 モース自筆サイン（品川歴史館1985〔Howard 1935・東京大学総合博物館動物部門所蔵〕より転載）



Received these two volumes today.
Thursday, December 13-1917.
Emeretta C. Williams.

Mrs. Franklin D. Williams.

図3 エメレッタ自筆メモ② (原寸大)



TO MARGARETTE W. BROOKS
WITHOUT WHOSE EFFICIENT HELP AND UNFLAGGING
INTEREST THE MANUSCRIPT WOULD NEVER
HAVE BEEN READY FOR THE PRESS
THIS WORK IS AFFECTIONATELY
DEDICATED

Introduced to the above by Prof. Morse.
Oct. 3, 1918.
E. C. W.

図4 エメレッタ自筆メモ③ (原寸大)

“I trust you will not be disappointed in this book.

Edw. S. Morse” …① (図1)

“Received these two volumes today.

Thursday, December 13-1917.

Emeretta. C. Williams.

Mrs. Franklin. D. Williams” …② (図3)

“Introduced to the above by Prof. Morse. Oct.3, 1918.

ECW” …③ (図4)

①について、“trust”は、現在、私たちが一般に用いているような強い確信の意味ではなく、「本書をきっと気に入ってくれると思う」という婉曲的な文意を表現するものである。これは当時としては通有の用法であった。また、この署名をモース自筆であることが確実な資料(図2)と比較した結果、大文字“S”の終点のはらい、大文字“M”の始点の進入角度、小文字“s”が右上方に膨らんだ後、左に向けて落ち込み、小文字“e”に連なる点など、多くの共通点が見られる。実際に“Morse”の部分を重ね合わせると2つの筆跡はほぼ一致する。文意と合わせてみても、本書面がモース自筆のものともみて間違いのないと思われる。

②から、フランクリン・D・ウィリアムス(以下、フランクリンと記述)夫人であるエメレッタ・C・ウィリアムス(以下、エメレッタと記述)なる人物が、本書を1917年12月13日にモースより受け取ったことがわかる。そして、“Mrs. Franklin D Williams”という、夫フランクリンを主体とする表現がとられていることから、エメレッタだけでなくフランクリンに対しても同様に謹呈されたことが推測されよう。

③は、モースの秘書であり、『Japan Day By Day』作成にあたってモースとともに4年間献身的に作業を行ったマーガレット・W・ブルックス(Margarette W Brooks、以下、マーガレットと記述)への謝辞の文章の下に書かれている。このため、“the above”はマーガレットを指していると思われる。そして、文字の癖から署名のECWはエメレッタと同一と考えられるため、1918年10月3日にエメレッタがモースからマーガレットの紹介を受けたという事実が読み取れる。

同年6月、モースはエール大学より理学博士の名誉学位を授与されており、このことに関してジョン・グールドをはじめとする友人にいくつかの書簡を送っている。モースは動物学以外の分野の研究者や政治家、俳優などとも知己であったが、フランクリンならびにエメレッタはそのいずれにも該当しない。人物についての詳細は不明であるが、モースの古い友人の一人と考えられる。この時期におけるこのほかの私的な交流は公になっていない部分も多く、本書は、この年のモースの行動の一部を物語っている資料といえる。

このメモが書かれたのはエメレッタが本書を受け取ってから1年ほど後のことであるが、彼女が

本書をモースに関連する出来事の備忘録として利用していたと解釈すれば、2つのメモの時期差についても理解しやすいように思われる。エメレッタはメモ以外にもモースの死亡記事をはじめ、6部の新聞の切り抜きを挟み込んでおり、このことはこの解釈を証左するものと思われる。また、下巻冒頭までしかペーパーナイフで切り開かれてないことからエメレッタは本書をすべては読んでいないことがわかる。読むだけでなく、著者に関連するトピックをその著書に記録・保存するという、彼女の本書の活用方法は、そのような使い方になじみのない日本人の我々にとっては興味深い。

IV. おわりに

同志社大学歴史資料館が購入した『Japan Day By Day』初版本に書かれているモースおよびエメレッタの自筆メモから、あまり公になっていない『Japan Day By Day』刊行当時、すなわち、晩年期のモースの行動ならびに交友関係の一部を読み取ることができる。また、ウィリアムス夫妻にそれぞれ初版本を謹呈したと考えられることや、公にされている他の書簡とともに、モースが『Japan Day By Day』に対してどのような心情を持っていたかについても考えることができるだろう。また、本書から当時の欧米における読書文化の一端が垣間見えよう。以上の点で、本書は高い資料的価値を有するといえる。

モース自筆サインの掲載にあたり、品川区立品川歴史資料館の白石祐司氏・塚越理恵子氏、東京大学総合博物館の諏訪元氏・野口和己子氏に便宜をはかっていただいた。記して感謝したい。

今回の報告にあたり、自筆メモの判読をはじめ、同志社大学言語文化教育センター中村艶子准教授に多くのご教示を得た。末筆ながら記して感謝いたします。

《引用・参考文献》

D・G・ウェイマン著 蜷川親正訳 1976『エドワード・シルベスター・モース』中央公論美術出版

E・S・モース 1917『Japan Day By Day』

品川区立品川歴史館 1985『開館記念特別展 モース博士と大森貝塚特別展示図録』

磯野直秀 1987『モースその日その日』有隣堂

Howard, L. O. 1935 Biographical Memoir of Edward Sylvester Morse, *National Academy of Science*



写真 “Japan Day By Day” 初版本